

訳注『出雲名勝摘要』(六)

要 木 純 一

○鬼の舌ふるひ

地ハ仁多郡、上三成村ニアリ。神世ノ時、鰐魚、阿井村ニアル玉姫命ヲ恋フテ、上リ来ル。命石ヲ以テ其流ヲ塞テ会セス。鰐大ニ怒リ、其舌ヲ振フ。故ニ此名アリ。高サ數十丈ノ断巖屹立シテ、屏風石アリ、壘石アリ、龜石、甌石アリ。大石、碧潭ヲ出テ、恰モ馬ノ浴シ起テ鬣ヲ振ハントスルカ如シ。遊ヲ好ムノ士、一タヒ此ニ至レハ、悠然トシテ出塵ノ想ヲナス。

【訳】鬼の舌ふるいは仁多郡、上三成村にある。神々がいらつしやつた時代、サメが、阿井村にいた玉姫命という女神に恋をして、川を上ってきた。玉姫命は、石で流れを遮つてサメに会おうとしなかった。サメは怒りのあまり、その舌をブルブルとふるわした。(その名残が地形として残ったので、)かくして「鬼(わにが詛る)の舌ふるい」の名前ができたという。高さ二百メートル級の断崖絶壁がそびえたち、屏風岩、壘岩、龜岩、甌岩等のスポットがある。大きな崖のような岩が、エメラルドグリーンの深い淵から突き出している様は、あたかも馬が水浴びをして立ち上がった時に、たてがみをふるわせている姿をみるようである。風雅な遊びを好む紳士達は、この地にくると、世間の俗塵から逃れた気分をゆったりと味わうことができる。

【注】鬼の舌ふるひ——現在是一般に「鬼の舌震」の表記で、「したふるい」と「ふ」は濁って読む。「おにのしたふる」ともいう。平凡社『世界百科大事典』の「鬼の舌震(おにのしたふる)」の項に曰く、「島根県南東部斐伊川支流大馬木川の中流部にある約三キロにわたる溪谷で、県立自然公園、天然記念物に指定されている。仁多郡奥出雲町。地名

は『出雲国風土記』の和爾伝承から転じたともいう。一体は花崗岩が浸食されて両岸が切り立った急峻な溪谷で、河水による大小の甌穴が河底にみられる。球状の割れ目をもつこうもり岩、千畳敷岩、畳岩などの岩塊と、両岸のミズナラ、コナラ、ナツハゼ、カエデなどの広葉樹を中心にアカマツが点在する」。

『出雲国風土記』仁多郡・山野の条・恋山に「古老伝へて云へらく、『和爾（わに）、阿伊村に坐す神、玉日女命に恋（した）ひて上り至りき。爾時（そのとき）、玉日女命、石（いは）を以（もち）て川を塞きしかば、逢ふこと得ずして恋ひし所なり』と云へり。故（かれ）恋山（したひやま）と云ふ」とあつて、もともとは、このあたりは「したひやま」と呼ばれたらしいが、やがて「したふるやま」に転化したらしい。「こひやま」とよむ説の方が一般的で、星野文叔もそう読んでいたと思うが、この条とは直接関係しないので、触れない。

『出雲風土記抄』（一六八三）は、松江藩士岸崎佐久次が、藩の税吏として国内を巡視中、風土記の記載について実地調査して注釈を加えたものである。島根大学図書館桑原文庫所蔵のテキストがもつとも信頼されるものとされる。

『風土記』の先述の恋山（引用文では「恋」を「こひ」と訓じている）の項について、以下のように述べている。

「鈔に云う、恋山は、阿位郷高尾村、俗に呼びて志多布留山と曰う、是也。此の処の川口、岩屋堆く重り崎嶇險阻なり。其の処に湖あり、所謂玉日女命石を以て河口を塞ぎて、鰐魚登るを得ざるの処なり。此の攸に到りて、鰐怖れて、舌端を震わして退ぞきぬと。故に俗に舌振山と曰う也。彼の龍門の魚、登ることを得る者は、化して竜と為る。鱗を奮い髻（ひれ）を鼓して、鰐魚如し此の処に登らば、額を点じて腮（あぎと）を暴（曝）さんか、抑も將た変じて交竜と為らんか、將た比目魚と為らんか、亦た未だ知る可からざる也。鰐曷為れぞ退くや。信に是れ奇怪不經の甚しき也」。（以上、大日方克己氏の「翻刻桑原家本『出雲風土記抄』」（『山陰研究』第七号別冊）を参照。読み下し文は筆者による。送り仮名等補う）

江戸期には、土地の人が「したふるやま」もしくは「したぶるやま」とよんでいたことが分かる。「したふ」と「したふる」の混乱、さらに「ひ（い）」の追加、一方「わに（和爾・鰐魚）」の「お（を）」に「へ」の転化等によって、現在の名称となったのであろう。ただ、この項は、名称の変遷には興味がなく、わにが舌をふるわしたという『出雲風

土記抄』記載の土地の伝承に重点を置いている。仁多郡——律令制の施行の頃より存在する郡。『出雲国風土記』では、大穴持命（大国主命）が、この地を、「豊かな土地」という意味の「爾多志枳（にたしき）小国なり」と呼んだことから「にた」と名付けられたと言われている。その後も、郡名は続き、明治廃藩置県後、松江県四区、島根県第二十二区（二十五区になるが、明治十二年（一八七九）郡区町村編制法によって郡名が復活した。『出雲名勝摘要』発行は明治十四年である。その後、郡下の町村は合併を繰り返し、二〇〇五年、仁多郡の範囲は、ほぼ奥出雲町となり、一部が雲南市に編入されている。上三成村——江戸期から明治初期までの村名。明治八年、下三成等五か村と合併して三成村となった。後三成町。戦後合併して仁多町、そして現在の奥出雲町となる。神世ノ時——前述。鰐魚——鰐は、鰻の異体字。古代中国語としては、爬虫類の揚子江ワニを指す。干宝『搜神記』「若し罪を犯す者は、鰻魚に投与せん」。獐猛で強力な顎を持ち、人を食べることもあるという共通点から、日本では魚類のサメ（シユモクザメ）を指すようになったらしい。『出雲国風土記』では「和爾」に作る。『出雲国風土記』意宇郡安来郷条でも少女が「和爾」に食われた話を載せている。『古事記』因幡の白兔説話では「和邇」、『日本書紀』海幸山幸説話では「鰐魚」の表記が見られる。現在に至るまで山陰地方ではサメ（食用に供する）をワニと呼んでいる。以上を踏まえて、ここも鰐魚を「ガクギョ」と音読みせず、「わに」と訓読みした。（なお「さめ」、「ふか」の和語も古くから存在するようではあるが、『書紀』以来の訓読みの通例に従った）。阿井村——仁多郡奥出雲町馬木付近。『出雲国風土記』では「阿伊」、「和名抄」では「阿位」、中世以後「阿井」が定着した。近世には上阿井村、下阿井村に分かれ、明治二十二年合併して、阿井村になり、後他町村と合併して仁多町となり、現在奥出雲町となっている。玉姫命——『風土記』の表記は「玉日女命」。他書に見えない神なので、正体不明。玉のように美しい阿井村の土地神なのであろう。恋ふて——「こい（ひ）て」のウ音便「こう（ふ）て」。「したぶるい」の地名語源にこだわれば、「したう（ふ）て」と読むべきであろうが、先述のように星野文叔は、語源に興味がなかったようなので一般的な訓読みにした。命石ヲ以テ其流ヲ塞テ会セス——『風土記』本文は「玉日女命、石（いは）を以て川を塞きしかば、逢ふこと得ずして恋ひし所なり」。「石」は『風土記』の一般的な読みに従った。後の「屏風石」以下、現在では石はすべて岩の表記になっ

ており、星野文淑も耳からの記憶によつて、「いは（わ）」と読んだと思われる。鰐大二怒り、其舌ヲ振フ——ここは『出雲風土記抄』所載の伝承に従う。故ニ此名アリ——「わに」が「を（お）」に転化したことに触れていないのは不審である。「河内」が「かわち」から「こお（う）ち」に、「王」が「わう」から「おう」に転化するような例から、読者は当然発音の類似に気づくと思つたのかもしれない。土地の人にとつて海のサメがここまで登つてくるのは想像しがたく、伝承の過程で「を（お）」に変わったのであろうか。鬼は、「隠（ヤン）」が語源であると言われるように、一般の人間の目から隠れた不思議な実態を持たぬ何かととらえていたのかもしれない。高サ數十丈ノ断巖——断岩。断ち切つたように高くそびえ立つ岩。劉滄・巫山廟に題す「猿は断岩に叫びて秋鮮稀なり」。屹立——高くそびえ立つこと。曹鄴・東郎山「東郎屹立して東方に向かう」。屏風石、疊石、龜石、甌石——現地の案内図によれば、今も、屏風岩、疊岩、龜岩、甌岩がある。石は「いわ（は）」と読むべきであらう。大石、碧潭ヲ出テ、恰モ馬ノ浴シ起テ鬣ヲ振ハントスルカ如シ——姚鼐『游媚筆泉記』「大石潭中より出づること、馬の浴して起ち、鬣を振いて首を宛（めぐ）らして而して其の侶を顧みるが若し」。姚鼐（一七三一—一八一五）は、清代の文章家、書家。清代古文復興の趨向を定めた桐城派の中心人物である。日本でも重んじられて、この文章は、明治期の漢文教科書にも採用されている。ただ、星野文淑や江戸期の日本人が全集に目を通したとは思えず、何らかの選集に掲載されているのを見たはず。遊ヲ好ムノ士——既述。一タヒ——「一」は「もしも・・・すれば・・・」のニュアンス。悠然——本来対象がはるか遠く離れて、自分と殆ど関係がないときに沸き起る感情。転じて、人間界から離れて、あくせくしない、ゆったりとした気持ちを表す。陶潜・飲酒其五「悠然として南山を見る」。出塵ノ想——塵にまみれた俗世から離れて、自然を楽しむ思い。孔稚珪・北山移文「夫れ耿介拔俗之標、瀟洒出塵之想を以て、白雪を度りて以て方絜、青雲を干して而して直ちに上る」。

田能村 直入
たのむら ちよくにゆう

嶮路危巖何足愁、我元林下旧樵僮。老来偏喜多天幸、又遇溪山錦繡秋。

【訓読】 嶮路危巖何ぞ愁うるに足らん、我は元林下の旧樵僮。老来偏えに喜ぶ天幸多くして、又溪山錦繡の秋に遇うを。

【訳】 この地の険しい道や恐ろしいほど高い岩など、何の心配があらうか、なぜなら、実はわたしはもともと森の中で、世を避けた古くからの木こり達の仲間だったのだから。年を取ってからはなおさらのことに、天がたくさんの幸運を下してくれて、故郷の竹田で過ごしたときと同様に、谷川流れる山の、錦の織物のように美しい秋の景色にまた出会えたことが嬉しくてたまらない。

【注】 田能村直入——一八一四—一九〇七。文人画家。名は痴。幼少期より田能村竹田に師事、後に竹田の養継子となった。生地豊後直入郡（竹田藩・岡藩）に因んで、明治期より直入と号す。漢詩は広瀬旭莊に学んだ。竹田に従って大阪に入り、近畿を遊歴、堺で漢詩結社、咬菜吟社を設立。大塩平八郎とも交流。画業は益々盛んになり、明治に入ってから南画家の中心人物となった。一八七八年、京都府画学校（現京都市立芸術大学の前身）設立を建議、このころ、絲原家の招きに応じて、一八七八年及び一八七九年に島根県に来遊。以下の四首連作は、このときの詩であろう。絲原記念館には、鬼の舌震を描いた『真景図画帳』が蔵されているというが未見。後、京都府画学校の校長を勤め、日本南画家協会の設立に関わった。以上、『島根県歴史人物事典』田能村直入の項（藤間亨氏担当）等を参照。藤間氏によれば、「このころの出雲地方では書画鑑賞熱が流行しており、直入の来雲を感激をもって歓待する。これに対して、直入は南画の鑑賞ならびに煎茶道を指導した。このため、出雲に文人遊びが盛行し、出雲の文化史上でも極めて重要な足跡を残す」。嶮路——「嶮」は「險」に同じ。険しい山道。阮籍・詠懐其六十一「險路疑惑多く、明珠未だ干む可からず」。戴叔倫・南賓にて蔡侍御の蜀に遊ぶを送る「積雲嶮路を蔵し、流水行年を促す」。危巖——危は、危険を感じるほど高いこと。『莊子』田子方篇「嘗みに汝と高山に登り、危石を履み、百仞の淵に臨まば、若能く射る乎」。ここでは、王維（一説に王昌齡）・香積寺を過ぐ「泉声危石に咽び、日色青松に冷やかなり」を意識するであろう。文同・西崑道友「絶巘玉干に聳え、危岩珠涎を瀉ぐ」。何足愁——「不足愁」に同じ。反語になって、愁えを振り払う気合いがより強くなる。楊万里・次日酔いて帰る「我酔えば彼自ら止む、酔うも亦た何ぞ愁うるに足

らん」。我元——詩では「我本」とするのが普通だが、平仄の関係で「元」の字にした。「元」は、今まで知られてなかったことだが、実はこうだったのだというようなニュアンスがある。石崇・王昭君辞「我は本漢家の子、將に單于の庭に適かんとす」。秋月潤・円侍者を送る「汝は吾が筆硯に侍するも、我は元一語無し」。林下——隱者が、世を避けてとどまる山林をさす。慧皎『高僧伝』義解二・竺僧朗「朗は常に蔬食布衣、人外に耽ずるを志す。……隱士張忠と林下の契りを為し、毎に共に遊処す」。靈徹・東林寺韋丹刺史に酬ゆ「相い逢うて尽く道う官を休むるは好しと、林下何ぞ曾て一人を見し」。旧樵儔——樵は木こり。漁師とともに、しばしば世を避けた隱者の仮の姿としてあらわれる。儔は、疇に通じ、同類、仲間、グループの意。曹植・王粲に贈る「中に孤りの鴛鴦有り、哀鳴して匹儔を求む」。老來——老いてから。老いると。來は、助字。杜甫・韋大夫之晋を哭す「老來涕泪多く、情は詩篇を強うるに在り」。偏喜——「偏」は、特に。老齡を迎えて、残り人生の少なくなると、ますます、小さくても、短くても、自然の美しさの享受があるがたいものと感じられる。自分でもなぜか分からぬが、やむにやまれず偏愛して、この一瞬を逃してはならないような気持。高璩「薛逢の贈別に和す「尊前偏えに喜ぶ君の留むるに接するを」。多天幸——天幸は、個人の努力によるのではなく、天が与えた幸福。僥倖。『莊子』漁夫篇「孔子又再拜して而して起ちて曰く、今者、丘は遇を得たる也、天幸の若く然り」。王維・老将行「衛青敗れざるは天幸に由る」。蔡襄・因りて書もて河東軫運楊樂道に答う「由来事を成すは天幸多し」。又遇——「又」は、さらにまたの意。昔山林で過ごしたときと同じように、と解釈した。齊己・新秋「始めて驚く三伏の尽くるを、又遇う立秋の時」。溪山——谷や山。羅鄴・冬夕江上にて事を言う五首其三「十里溪山新雪の後」。杜荀鶴・李隱居に寄す「溪山必ずしも錢を將て買わず」。錦繡秋——錦に美しい模様を刺繡した織物。美しく、素晴らしい事物にたとえる。必ずしも秋の景色のみにたとえるわけではない。劉禹錫・樂天の金紫を賀するの什を貽らるるに酬ゆ「珍重す和詩錦繡を呈するを」。趙善慶・水仙子・仲春の湖上「六橋の錦繡、十里の画図、二月の西湖」。日本では、錦は赤系の派手な色ゆえか、秋の紅葉のたとえによく用いられる。さらに、「錦秋の候」のような熟語も生まれた。直入はこの日本の用語の伝統に従って、「錦繡秋」といったのであろう。

*初めて、鬼の舌震に入つて、山々を彩る美しい紅葉に感動した様子。故郷竹田地方は、江戸時代、木材の生産で有名だったから、近くの山を散策すれば、木こりにもしばしば出会ったことであろう。山水画を愛する気質もその中で育ったに違いない。起句、承句は、六十代の年齢で、案内人に老体をいろいろ氣遣われるのに対して、なお意氣盛んである様をふざけて言い返しているのだろうか。

半日溪迎去又来、両山絶壁合還開。自歛墨客胸中曠、收得幾多丘壑回。

【訓読】半日溪迎去り又来る、両山絶壁合い還た開く。自ら歛ぶ墨客胸中曠くして、幾多の丘壑を収め得て回らんことを。

【訳】半日かけて、溪谷のそばをいったりきたりしている。兩岸の絶壁が、閉じたかと思うとまた開ける。ああうれしい、文人墨客たる私は、心が限りなく広いので、いくつもの山や谷の美しい景色をその心に収めて帰ることができる。

【注】半日——もともと、昼の半分程度の時間、日本語と同様、長い時間を指す。皇甫松・采蓮子「端無くも水を隔てて蓮子を抛つ、遙かに人に知られて半日羞づ」。溪迎——谷の付近。ここでは、遊歩道をいうのであろう。庾肩吾・道館詩「仙人白鹿の上、隱士潜溪の辺」。去又来——呂岩・七言其五十九「金鍾灼灼として天階に舞い、独り自ら龍に騎りて去り又来る」。両山絶壁——「兩岸絶壁」としたいところを平仄の関係で「山」に変えた。杜甫・七月一日終明府の水楼に題す二首其一「絶壁雲を過ぎて錦繡を開く」。謝靈運・石門の最高頂に登る「晨に策つきて絶壁を尋ね、夕べに息いて山栖に在り」。蘇軾・石鐘山記「莫夜月明らかなるに至りて、独り邁と小舟に乗って絶壁の下に至る」。合還開——楊万里・春雨止まらず二首其二「春雨毛の如く又埃に似る、雲は開きて還た合し合して還た開く」。自歛——詩では「自喜」がよく用いられるが、平仄の関係で「歛」字を用いる。「自」は英語の再帰代名詞にあたる。「自分（だけ）」で、自分が……であることをよろこぶ」。白居易・僧智如と夜話す「憂勞は智巧に縁る、自ら喜ぶ百も能無きを」。陸機・鞠歌行「鼓鐘歇まば、豈に自ら歛ばんや」。墨客——文人一般をいう語。楊

雄・長楊賦「言未だ卒らざるに、墨客席を降りて、再拜稽首す」。本来は、墨の擬人化であるが、この賦が本となつて、文人の別称となつた。杜甫・胡侍御の書堂に宴す「翰林は名素有り、墨客は興違ふ無し」。胸中曠——転句・結句は「胸中丘壑」を意識する。黄庭堅・子瞻（蘇軾のこと）の枯木に題す「胸中元より自ら丘壑有り」という句をもとにした成語であるが、すでに六朝から、文人は、俗世界を離れて、自然の山水に遊び、山水の氣を内面化するべきであるという、絵画観、文学観があった。「曠」は広々として何もない状態。雑念なく、自然の美しさを吸収できるだけ吸収することができる状態をいうのであろう。取得——この語は、もともととは収めて得る、という意味で、敵を捕獲するような場合に使われた。『後漢書』公孫瓚伝「生口七万余人を取得せり」。唐代には、得が助辞的な機能になり、収を二文字に引き延ばしたに過ぎなくなり、意味も、取得する、手に入れる等、広く一般的なものに広がった。曹鄴・陽朔の友人に寄す「我月中に到りて種を收得し、君が為に移して故園に向かつて栽ゆ」。王建・宮詞一百首其四十一「收得得たり山丹紅蕊の粉、鏡前に洗却す麝香の黄なるを」。日本語では、「取得罪」のように、他人の所有物を盗んで、自分のものにする場合にしばしばこの語を使うが、ここはそうではない。幾多——数や量がどれほど、という意味。英語の how much、how many。どれほど多くの、という感嘆の気持ちが起こることとは、その量や数はかなり多いということである。したがって、たくさん、と意識することもできる。李商隐・代りて贈る其二「総て春山を把りて眉黛を掃く、知らず幾多の愁いを供し得たるかを」。丘壑回——前述の「胸中丘壑」に関する説明を参照。

*風狂にこの山水を練り歩くのは、我ながら滑稽なほどである。でも、氣に入つたのだからしょうがない。この自然を味わうにふさわしい自分という人間が、この地にいるというありがたさ、巡り合わせの不思議さを、これからの南画界を背負おうとする自負をにじませながら詠っている。

老楓安分在深山、人跡疎辺占静間。却怪春情猶未忘、也逢青女凭紅顔。

【訓読】老楓分に安んじて深山に在り、人跡の疎なる辺りに静間を占む。却って怪しむ春情猶お未だ忘れず、也た

青女に逢いて紅顔を発す。

【訳】年老いた楓は、自分の身の程をわきまえて、奥深い山に植わっている。訪れる人の足跡もまばらなところで、静かで穏やかな世界を独り占めしている。それなのにおかしいことだ、この楓はいまなお恋心を捨てきれないでいるようで、青空から降りてくる霧霜を司る女神の青女に出会ったり、顔を真っ赤にしているよ（紅葉することをいう）。

【注】老楓——老いた楓樹は、秋冷ですぐに赤くなるという。楊万里・豊山小憩「野香寒蝶聚り、秋色老楓知る」。

日本のカエデと中国の楓は、葉の形状は似るが、中国の楓の葉は何倍も大きい。別の種であるが、日本の漢詩人は承知の上で「楓」字を用いる。安分——真面目に自分の与えられた本分をまもること。分は、人ごとに運命として分け与えられたもの。盧綸・暢当山居に寄贈す「君子固より分に安んず、労者の譏りを聴く母れ」。青年期より、禪を修した直入は、禪語の「知足安分」等が、念頭にあつたのかもしれない。「知足安分」しようとしても悟れない、人間の愚かさ、面白さがこの詩の底にあるように思う。

在深山——白居易・木蓮樹巴峽山谷間に生じ……「幾度移さんと欲するも移し得ず、天拋擲せ教めて深山に在り」。人跡——人の足あと。『史記』秦始皇本紀「人跡至る所、臣為らざる者無し」。張協雜詩十首其九「溪壑人跡無く、荒楚鬱として蕭森」。韋応物・閑居端及び重陽に寄す「山は野寺に明かにして曙鐘微かに、雪は幽林に満ちて人跡稀なり」。劉宰・野犬行「田舎煙無く人跡疏なり、我之を言わんと欲して涕淚俱にす」。疎辺——疎は疏の俗字。稀であること。「疎辺」と熟することはなく、「疎処」が常套。

平仄の關係（日本漢詩ではしばしば処の代わりに辺を用いる）と、「人跡疎なるあたりに」と読み下した場合の、日本語としての調子の良さを愛したのであろう。杜牧（一説に許渾）・紫藤「花を移して疎処に種え、葉を勵りて困時に攀づ」。占静問——問は、本字は問。ここでは閑の意。『楚辭』宋玉・招魂「像して君が室を設く、静閑にして安らかならん些」。普通は「清閑」の方が詩語としては好まれる。平仄の關係と静かさが特に詠みたかったのだろう。

蘇軾・胡完夫に次韻す「万事会らず須く伯始に諮すべし、白頭我の清閑を占むるを容れよ」。却怪——双声の語。印象的な子音の連続で、転句の驚き、意外性を強調する。白居易・郡中夜李山人の三楽を弾くを聴く「却って怪しむ鍾期の耳、唯だ水と山とを聴くを」。春情——男女の恋愛感情、情欲。子夜四時歌・春歌二十首其七「那ぞ能く聞

中の繡、独り春情を懷く無からん」。王融・琵琶を詠む「糸中意緒を伝え、花裏春情を寄す」。猶未忘——年老いて捨てたはずの春情をまだ忘れておらず、春情を催したようだ。王十朋・安靜堂旧額に復す「今才かに五日京兆なる耳、此の陳跡を眷りみれば猶未だ忘れず」。也逢青女——「也」は、「亦」に同じ。「……もまた」の意の副詞。

唐詩でよく用いる。ただし、何に對して「も」と応じているのかいささか疑問。おそらく、隱居して悟った風であつて「も」というつもりか。青女は霜や雪を司る女神。『淮南子』天文訓「秋三月に至りて……青女乃ち出で、以て霜雪を降す」。その高誘の注に、「青女は天神。青霄の玉女霜雪を主どる也」。晴れた青天（黒みがかつた青。古典では夜の空も青色という）から霜が降ることを古代人が不思議に思つて、女神を思い浮かべたのであろう。さらには晩秋を司る女神とされた。蕭統・銅博山香爐賦「時に於いて青女寒さを司り、紅光景を翳（かざ）す」。杜甫・秋野其四「飛霜青女に任せ、被を賜わるは南宮を隔つ」。余翔・晋安館中懷いを紀す其四「節序青女に逢うも、他郷なれば未だ衣を授からず」。發紅顏——紅顏は、若者の血色のよい顔色。杜甫・暮秋裴道州の手札を枉ぐ「憶う子の初めて永嘉に尉と為りて去り、紅顏白面の花は肉に映ず」。さらには、青少年時代の活発なさまを指すようになった。沈約・君子有所思行「共に矜る紅顏の日、俱に忘る白髮の年」。李白・孟浩然に贈る「紅顏軒冕を棄て、白首松雲に卧す」。發は隠さないで、外に現れること。白居易・自詠「夜鏡白髮を隠し、朝酒紅顏を發す」。恥ずかしくて顔を赤らめているわけではない。

*老楓は、眼前の光景であるとともに、自分自身を投影しているのであろう。老いさらばえて、これまでの芸術家人生に満足し、隱居しようと思っていたが、この素晴らしい秋の景色を見て、若いときの氣力や美への愛がよみがえつたようだ。事実、老齡にもかかわらず、このあと直入は京都に帰って、画学校の校長になり、南画界を牽引していくことになるのである。

巖腰紅葉枕溪流、眠月臥雲霜露秋。山色粧来如有待、不知山色待吾不。

【訓読】巖腰の紅葉は溪流に枕し、月に眠り雲に臥す霜露の秋。山色粧い来る待つ有るが如し、知らず山色吾を待

つや不^いなやを。

【訳】大きな岩の中腹に紅葉がかかつており、谷川に臨んでいる。月の光の中で眠り、雲の上に臥しているのだ、霜や露の下る晴れ渡った秋の夜に。山の景色は、色とりどりに装って、何者かを待っているかのようだ。ひよつとしたら、ほかならぬこの俺が絵を描いてくれるのを待っていたのかも。

【注】巖腰——巖は岩とほぼ同じ。山のような大きな岩。丁宝臣・崇法院に留題す「岩腰を鑿破して磴道成る」。巖腰は、本来は、大岩の中腹あたりをいうと思われるが、岩の側面全体を指すのかもしれない。別解として、「巖は紅葉を腰にして溪流に枕し」を提案する。「巖」を主語、「腰」を動詞で読んで、腰のあたりに赤い模様の服のような紅葉を巻いて、谷川を枕のようにして、大きな岩が寝転んでいると擬人的に見立てるわけである。「腰紅葉」と「枕溪流」とが句中対になって調子がよい。「枕」字にこだわれば、「巖腰の紅葉」が、「溪流に枕する」のはおかしい。もっとも、「枕」は平仄の関係で、「臨」の代わりに用いただけかもしれないし、別解では、巖の描写が漫画的であつて、興趣に乏しい。枕溪流——「枕」は、平仄の関係で「臨」字の代わりに用いた。ある地形や事物が寝転がつて枕にするぐらい近いということであろう。『漢書』嚴助伝「会稽の東は海に接し、南は諸越に近く、北は大江に枕す」。拾得・其五十三「雲林最も幽栖にして、澗に傍いて月溪に枕す」。邢群・郡中懷う有り、上睦州員外杜十三兄に寄す「城は溪流に枕して更に浅斜」。眠月臥雲——禪語の「臥月眠雲」を分解して組み立てた。「臥月眠雲」は、山野に隱遁して、清らかで趣のある日々を送ること。『虚堂和尚語録』卷一「僧問う、呼猿洞口、無心にして月に臥し雲に眠る、長水江頭、正に好し綸を抛げうち釣を擲げうつ」。直人は、黄檗宗門で禪に励んでおり、晩年は住持にもなっている。杜荀鶴・人の呉に遊ぶを送る「遙かに知る未だ月に眠らず、郷思漁歌に在るを」。皎然・清江「雲に臥し独り処るを知る、月を望み時を同じくするを憶う」。白居易・元郎中の懷いを書いて贈ら見るに酬ゆ「身を終うるまで雲に臥す伴と作らんと擬す、月を逐いて須く葉を焼く錢を収むべし」。霜露秋——宋玉・九辯「霜露慘悽として而して交も下り兮、心は尚お其の渇らざるを幸いとす」。陶潜・庚戌の歳九月中西田に於いて早稲を穫る「山中霜露饒かにして、風氣亦た先んじて寒し」。沈周・史西村と途次に相い値いて、遂に同に載る「遠遊尽くさず江湖の

話、多病還お驚く霜露の秋」。 山色——山の景色。 江淹・征虜に始安王に従う道中「山氣百里に亘り、山色雲と平かなり」。 岑參・岐州北郭嚴給事の別業に宿す「郭外山色溟く、主人林館秋なり」。 粧来——蘇洞・金陵雜興二百首其一百八「花案粧い来りて日日新たり」。 如有待——王適・江上懷い有り「棹歌数曲待つ有るが如し、正に見る明月東海を度るを」。 杜甫・後遊「江山待つ有るが如し、花柳更に私無し」。 不知——不知+疑問文で、・・・なのかしら。 山色待吾不——李白・江上に皖公山を望む「吾れの還丹の成るを待ち、跡を投じて此の地に帰らん」。 文同・韻に依りて閩南に和す五首其一平阿馬上「才かに郵亭に到れば便ち沈思す、向來佳景は吾が曹を待つ」。 不——句末の「不」はふ（ふう・ひゅう）と読み、反復疑問文を作る。 ただ、「不知」の「不」と重なるのは近体詩における同字不重複の原則に反していてまずいが、一方、この時、この場所で、この景色に、他ならぬ自分が巡り合わせたことの不思議さに対する感慨が、戸惑うような措辞となつてあらわれたのかもしれない。

*山々はあたかも修行しているかのように、己を高め、私が来るのを待つていたかのようだ。 その期待に応えて、さあ、これからおまえ達の精神を写した、立派な絵を描いてやろう。 創作意欲に駆られる、自分自身に驚きながら、この連作を締めくくつたのである。

かしこみし 鬼おにもありけん 別火べつか 千秋ちゅうしゅう
 岩山いわやまも 心やすけに かよふ猿うさるかな

【訳】 誰もが恐れていた鬼もいたであろうこの岩山も、時がたち、猿たちが気安く駆け回っていることよ。

【注】 別火千秋——幕末の歌人・国学者。 出雲大社の上官。 本名別火吉満、通称治郎、千秋。 『出雲名所歌集 初篇』等当時の多くの和歌集にその作品が収められている。 以上、森繁夫『名家伝記資料集成』（思文閣出版）による。 この書の別火には「ベツヒ」とルビが打つてあるが、正しくは「べつか」。 別火は『広辞苑』によれば、「神事を行う者が、穢にふれないように別にきり出した火で食物を調理して食すること。 また、障りのある人が炊事の火を別にすること」。 これに由来して、出雲大社上官の姓にもなっている。 かしこみし——「かしこむ」は、和歌にはあまり用

いられない。恐れること。「海中（わたなか）を渡るとき、なかしこませまつりそ」（『古事記』上）、「大君の命（みこと）かしこみ磯に触り海原（うのはら）渡る父母を置きて」（『万葉集』四三二八）。古代風、万葉調の語で、昔のことを莊重に歌って、下の句に、それと対比して卑俗な猿の出てくる滑稽さがある。「かしこむ」は鬼が玉姫命に對して恐れているようにも取れるが、全体の歌意からは、やはり鬼が人々に恐れられていたのだろう。鬼もありけん岩山も——「鬼」の語によって、風土記の「わに」を指しているように思えない。やはり、「鬼の舌震」の名から、訳の分からない異形のものにこの辺り一帯が支配されていたと夢想したのであろう。舌震との関係は見えないが。

心やすけに——氣安げに。親しげに。のんびりと。『源氏物語』竹河「今めかしう心やすげにもてなして、世にも故あり、心にくきおぼえにてさぶらひ給」。かよふ——行き来する。伝山部赤人「ほととぎすかよふ垣根の卯の花の憂きことありや君が来まさぬ」。猿かな——ニホンザルは本来は「猿」で、メガネザル等の「猿」とは違うが、日本では通用。猿は、優雅な和歌にはふさわしくない題材。大伴旅人「あな醜賢しらをすと酒飲まぬ人をよく見れば猿にかも似る」の如く、ふざけた歌でしか使われない。卑俗な感じで、鬼神のいた神話時代が無限に遠くなってしまう霧囲氣が醸し出される。

*前半の訳の分からない神世の世界と後半の卑俗な現実世界の単純な重ね合わせが面白い。「かしこむ」と「心やすげ」「あり」と「かよふ」「鬼」と「猿」、重々しさと軽さが対比されている。おどろおどろしい奇岩によって、開かれそうになった異世界への入り口が、猿の姿を見ることによって無事閉じられる、安心感そして残念感がこの歌の持ち味であろうか。太古からの長大な時間の推移に対する感慨も感じられる。

雪^{ゆき}な^だた^れ 何^{いずこ}処^{おと}や鬼^{まづえ}の 舌^{きつくせん}ふ^りる^ひ

【訳】 溪谷が雪崩に埋まってしまっている。どこだろうか。伝説の鬼が舌をぶるぶると振らせているのは。

【注】 雪なだれ——初春の季語。なだれは、本来山や坂などが崩れること。『芭蕉一座連句』・歌仙ほしさきの「築山

のなだれに梅を植ゑかけて 自笑」。現在は「なだれ」だけで雪のなだれを指すようになったが、江戸時代までは、雪なだれといつていた。『新続犬筑波集』『春道のつらき山越えや雪なだれ』。 何処や——どこであろうか。直接

的には雪崩が景色を隠してしまつて、名勝鬼の舌震が見えなくなつてしまつたことをいう。しかし、気分的には、雪なだれについても「何処や」と問いかけている。真つ白な雪景色の中をあてどなくさまよつてゐる心もとなさ。なだれの音がどこか遠くで聞こえてゐると設定してもよいかもしれない。 鬼の舌ぶるひ——表面的には、鬼が舌をふるわせたので、雪崩が起つたという諧謔であろうが、サメなのか、鬼なのか、知らないが、何かが、この銀世界の下のどこかで、人知のあずかり知らぬ営みを行つてゐるような、不思議な感覚を詠んでゐるのではないか。

*芭蕉『奥の細道』また『猿蓑』所収の句「笠嶋はいづこさ月のぬかり道」を意識するであらう。芭蕉が、藤原実方の墓があるという笠嶋を訪ねようとしたが、折からの五月雨で道が悪く、断念せざるを得なかつたことを詠んでゐる。地名の「笠」を、「ぬかり道」の眼前の風景に付け合せて作り方である。この句も、眼前の風景の「なだれ」を地名の「鬼の舌震」に付け合わせる趣向。順番は逆のようであるが、真ん中に「いづこ」が入ることによつて、確かにあるものが存在していることは明白なのに、それに到達できないじれつたさ自体を興あるものとして楽しむ態度が、芭蕉と曲川で通底してゐるようである。そこに、人生の悲哀をも感じてゐるのかもしれない。

○出雲赤壁いずもせきへき

勝ハ国ノ東北端ニアル雲津浦くもづうら（島根郡）ノ海岸ナリ。断巖絶壁、高サ数十丈。其色赭黒ニシテ、凡ソ二十町二度タル。松アリテ葱々、岩ニ倚テ眠リ、瀧アリテ轟々、石ヲ衝テ碎ケ、間鳥声ヲ聞キ、会魚ノ躍ルヲ見ル。瀧ノ名ヲ尾野戸ト曰フ。高サ五間餘、幅一間有半。北風吹来リ、水波ハ稍興ルト雖トモ、亦当サニ中秋舟ヲ泛フルノ行アルヘシ。

【訳】この名勝は、出雲国の東北のはしにある雲津浦（島根郡）の海岸のことである。断崖絶壁で、高さは約一百五十メートル。その色は赤黒く、幅は二キロメートルほどずっと続いている。松が青々と生えていて岩に寄りか

かつて這い眠っているかのよう、滝が轟々と音を立てており、石にぶつかって飛沫を飛ばしている。時々、鳥の鳴き声が聞こえ、ひよっと、魚が飛び上がるのが見えたりする。その滝の名は尾野戸（おのえ）といって、高さは九メートルあまり、幅は二・七メートル。北風が吹くと、波が少し上がるが、それでも、中秋にはぜひ船を海に浮かべてこの赤壁あたりをずっと巡ってみるべきである。

【注】出雲赤壁——雲津より海路で西に数百メートルの所にそびえ立つ巨大な岩。鉄分を含んでいるので、酸化して赤黒くなっている。『島根県誌』（島根県教育会 一九二三。世界聖典刊行協会より、一九七九覆刻刊行）によれば、『松江藩儒雨森精翁称して出雲赤壁と呼べり』。この説が、本当ならば、雨森精翁は、従来、日本はもとより、地元でも知る人が少なかったこの勝景を、中国の赤壁に比することによって、かねて世に知らしめたいと思っていたのではなか。僻陬の地ゆえに、出雲の自然や人物が注目されないのを彼は残念に思っていた。雨森精翁は、星野文淑の師として、本書に、序文や詩文を寄せ、校閲にも関わっている。命名して間もない、出雲赤壁をなんとしても、本書に入れたかったものと思われる。中国の赤壁は、中国後漢末期の二〇八年、曹操軍と孫権・劉備連合軍の間の戦いが起こったところである。場所は、現在の湖北省咸寧市赤壁市。呉の將軍周瑜によって、曹操の軍船が、この赤い巨大な崖である、赤壁の下で焼き尽くされ、曹操は敗走した。北宋の文学者・政治家蘇軾（一一三七—一二〇二）が、黄州（現在の湖北省黄冈市黄州区）に流されたとき、赤壁に遊覧して、有名な前赤壁賦、後赤壁賦を作った（一一〇八—二）が、それはこの古戦場の赤壁とは場所が違う。中国に行くことがなかった日本の漢詩人は、所在地の考証などどうでもよく、「赤い壁」という名称と、三国時代の古戦場であることと、蘇軾の前後赤壁賦で、幻想を膨らませればよいのである。勝——他にまさることから、優れたところを指す。ここでは名勝、景勝。王勃・滕王閣序「勝地常ならず、盛筵再びし難し」。国——出雲国。東北端——出雲赤壁は、松江からは東北の方向にあり、海に面している。また、隣の伯耆国である弓ヶ浜には山を南に越えることになるが、かなり近い。雲津浦——現松江市美保関町北東部の雲津。『風土記』に、「久毛等浦（くもとらのうら）。広さ一百歩あり。東より西に行く。十の船舶（は）つべし」とある。平安末期に、源義親がこの地で反乱を起こし、鎮圧された（一一〇八）というが、詳細は分からない。出雲

では、海岸の村は、浦と称し、雲津浦の名は江戸時代からあった。明治になってからもその名を襲い、明治二十二年に島根郡美保関村大字雲津となる。美保関村は後に町となり、現在は松江市に併合。島根郡——潜戸の項参照。断崖絶壁——垂直に切り立った岩壁。周囲から孤立している感がある。高サ数十丈——諸観光資料によれば、高サ一三〇メートル、幅七〇メートルの巨大な岩。赭黒——「赭」は赤土、または赤土の色。「赭黒」と熟した形では、中国では使われないようで、日本独自の色彩用語であるらしい。赤土色を黒ずませたような色。二十町二度タル——これはいわゆる出雲赤壁に限らず、島根半島北岸東部（雲津浦から美保関灯台付近までの）約三キロメートルの赤色の海岸一帯をいうのである。不正確な書き方である。葱々——草木が青々として盛んに茂っているさま。王充『論衡』吉驗「王莽の時、謁者蘇伯阿能く氣を望む。使いして春陵に過ぎる。城郭鬱鬱葱葱たり」。李白・侍従して温泉宮に遊宿す「日出でて佳氣を瞻れば、葱葱として聖君を繞る」。岩二倚テ眠り——劉孝威・涼を逐うの詩に和し奉る「岩石冷やかなるに倚りて欣び、池に臨んでは水の涼しきを愛す」。瀧アリテ轟々——滝の音がとどろき渡る様。韓愈・貞女峽「懸流轟轟水府を射る」。石ヲ衝テ碎ケ——方干・秋晩の林中、賓幕に寄す「泉玉声を漱ぎ石寶を衝く」。間鳥声ヲ聞キ——「間」は、間隔をおくという動詞であつたのが、連続ではなく、間をおいて時々というような副詞的用法に変わった。潘岳・楊氏七哀「堂は虚にして鳥声を聞く、室は暗くして日夕の如し」。会魚ノ躍ルヲ見ル——「会」は、ある事象に出会うことから、たまたま出くわす意味となり、副詞化した。詩経・旱麓「鳶は飛びて天に戻（いた）り、魚は淵に躍る」。瀧ノ名ヲ尾野戸ト曰フ——この瀧のことは、他書に見えず、不明。尾野戸もどう読むかわからない。「おのと」では意味をなさないので、しばらく「を（お）のへ（え）」と読んでおく。「をのへ」は、尾上。山や丘の頂。峰。大江匡房「高砂の尾上の桜咲きにけり外山の霞立たずもあらなむ」。高サ五間餘、幅一間有半——瀧の存在が地図等で確かめられないため、不明。北風吹来り、水波ハ稍興ルト雖トモ——蘇軾・前赤壁賦「清風徐に来り、水波興らず」を換骨奪胎して、逆に日本海の荒れる様を表現をする。しかし、また、中国の赤壁と重ね合わせる効果もある。亦当サニ中秋舟ヲ泛フルノ行アルヘシ——「泛舟」は、舟を水に浮かべ、乗って遊ぶこと。班固・西都賦「舟を山東に泛べ、淮湖を控引し、海と波を通ず」。蘇軾・前赤壁賦の冒頭に「壬戌

之秋、七月既望、蘇子は客と舟を泛べ赤壁之下に遊ぶ」とあり、こちらは中秋の名月ではないが（七月は初秋、既望は十六日の夜）、秋の月を楽しむという点では同じ。やはり、少しずらしながら、出雲赤壁と赤壁賦の赤壁とを重ね合わせる趣向ではないか。

まつだ
松田 淞雨

江風山月満孤舟、斗酒鱸魚好此遊。一起髯蘇重著筆、雲州未肯讓黃州。

【訓読】江風山月孤舟に満つ、斗酒鱸魚此の遊びに好し。一たび髯蘇を起こして重ねて筆を著くれば、雲州未だ肯えて黃州に譲らず。

【訳】長江とみまがう海を渡る風と赤壁を彷彿とさせる山にかかる月からの光とが、一艘の船にみちみちている。一斗の酒や鱸の魚があるのは、この度の遊覧にうってつけである。ひげ面の蘇東坡さんを生き返らせて、この景色を書かせたら、どうだろう。わが出雲国の赤壁は、決して蘇東坡さんが赤壁の賦で詠んだ中国黃州の赤壁には劣ることはあるまいぞ。

【注】江風山月——蘇軾『前赤壁賦』を意識。「江」も「風」も「山」も「月」も何回も出るが、特にこの四者がそろった、「惟江上之清風、与山間之明月」句を意識する。蘇軾のいう赤壁は長江沿いで、出雲赤壁は海辺だが、このように典故を用いることで、海ではないのに江の風が吹くというように、中国と日本の風景が二重写しになるような効果がある。方岳・董一之の花木抄に題す「江風山月無尽藏なり」。江風は長江（及びその支流）を渡る風。劉孝威・帆もて吉陽洲に渡る「江風暁を凌ぎて急なり、鉦鼓晨を候ちて催す」。山月は山にかかる月。皎然・呉の匡山の破寺に宿る「野花寒くして更に発き、山月暝くして還お来る」。孤舟——連れない一隻だけの舟。孤独ではあるが、自然の景物を独り占めしたような快感もある。陶潜・始めて鎮軍參軍と作り曲阿を経るとき作「眇眇として孤舟逝き、縣縣として帰思紆なり」。『前赤壁賦』に「孤舟の嫠婦を泣かしむ」の句がある。斗酒鱸魚——起句に対して、承句は蘇軾「後赤壁之賦」を意識。「客曰く、今者の薄暮、網を挙げて魚を得たり。巨口細鱗、状は松江之鱸に似た

り」「婦曰く、我に斗酒有り、之を蔵すること久し矣」。陶潜・雜詩十二首其一「歛を得ては当に樂しみを作し、斗酒もて比隣を聚むべし」。鱸は、中国江南松江（しょうこう）の特産で、次の故事で有名。劉義慶『世說新語・識鑑』「晋の張翰洛に在り、秋風の起つを見て而して故郷の蓴鱸を思う。因りて官を辭して歸る」。日本の松江（まつえ）でも、たまたま、鱸の料理が名物だが、同じ字で書いても、中国の鱸と日本のスズキは別種である。好此遊——前句対の七絶で、「満孤舟」と対になるとみて、「此の遊びに好し」と讀んだ。やや、変な句作り。「此」は、近体詩ではあまり使わないが、もしあえて使うときは、他の場所や時間では得られないまさにこのとき、といった、一回性、瞬間の感動を伴うようである。『後赤壁賦』「一道士を夢みる。……曰く、赤壁之遊びは樂しき乎」。一起——ある事が一旦起これば。「一」は、「一旦」「もしも」のような仮定のニュアンスがある。劉向『說苑』敬慎「秋風一たび起これば、（蓬の）根は且さに抜かれん矣」。ここの「起」は「起死回生」のように、死人を生き返らせるのつもりで用いているか。髯蘇——蘇軾の別称。彼は髯（ほおひげ）が多かった。蘇軾・客位假寐「同僚事を解せず、愠れる色もて髯蘇を見る」。鄭允端・東坡赤壁図「清風明月を留め得て在り、魚を網して酒を謀り髯蘇に付さん」。重著筆——著は着の正字。筆を紙に着けて、詩文書画をかくこと。王士禛『池北偶談』談藝八「即い史道碩、戴嵩ら画手をして場を擅いままにせ使むるも、未だ能く此に至らじ。後人如何ぞ著筆せん」。雲州——出雲国の別称。「雲州往來」のように、早くから、用いられていたが、江戸時代に松江藩の雅称として定着。浮世草子『けいせい伝受紙子』（二七二〇）「代々雲州（ウンシウ）の城主として、家殊に繁榮せしが」（『日国』による）。未肯讓——雲州の赤壁は、その素晴らしさを黄州の赤壁に負けたと讓することを承知するとは限らないぞ、の意。「未」は、過去の否定ではなく、ある状況や心理に達していないこと。おずおずとした否定のように見せかけて、実は断固たる自信をもった書き方。「肯」はうべなう、承諾する。陸游・三井觀に遊ぶ「呉生名は世に擅いままにし、睥睨して未だ肯えて讓らず」（この「未肯」は過去、これまでの否定）。龔詡・亡内女兄徐氏哀挽「名姓は自ら太史を書するに期す、風声は未だ肯えて前賢に讓らず」。黄州——隋代に現在の湖北省黄冈県を中心とする地域に置かれた州名。現中国湖北省黄冈市黄州区。蘇軾が流謫せられて、前後の赤壁之賦を書いた所。したがって、古戦場の実際の赤壁とは別。

*松田淞雨は『出雲名勝摘要』成立に関わった雨森精翁の高弟。雨森精翁が果たして出雲赤壁を命名したならば、松

田湍雨らに現地に赴かせ詩を作らせて、新觀光地として顕揚しようとしたことは十分に考えられる。雨森精翁は、出雲が僻地故に、優れた人物や風景が、日本国に知られていないことに、常々切齒扼腕していた。立久恵峡の漢文を参照。松田湍雨もよく師の要請に応えて、出雲赤壁を、蘇東坡が遊んだ中国の赤壁と重ね合わせた上で、出雲赤壁が中国の赤壁に勝るとも劣らぬことを高らかに宣言している。

焼立しやきたて 船ふねのけふりも 忍しのふまで 春はるは霞かすみめる 波なみの上うへかな
吉岡よしおか 敬勝たかかつ

【訳】あの中国の赤壁で燃え上がった船の煙が想像されるほどに、春は他の季節と違って、霞が出雲赤壁の海上に一面に広がっている。(また蒸気船が石炭を燃やして立てている煙までも思い起こされる)

【注】吉岡敬勝——森繁夫『名家伝記資料集成』所載。「吉岡敬勝 松江藩士 裁判所書記 亀文門 出雲国皇学者歌人学系略初篇」とある。「敬勝」の読みはこの書のルビに従った。焼立し——「焼き立つ」は、「立てる(立つ)」を強意と考えれば、盛んに焼くの意味。何かを「立てる」と考えれば、焼いて煙を立てる意味となる。万葉集一二七四「志賀の海人の煙(けぶり) 焼き立て焼く塩の辛き恋をも我れはするかも」。原文は「鹿海部乃火氣焼立而燎塩乃辛恋毛吾為鴨」。この場合は煙を立てる意。第二句を「けけやきたて」とよむ説もあるようだが、この歌は、「けぶりやきたて」のよみを本としている。『中華若木詩抄』上にまさに「赤壁にて、周瑜に焼き立てられて」とあって、こちらは盛んに焼く意であろう。吉岡敬勝の歌には「けぶり」とあるので、万葉集と同じく、「焼いて煙を立てる」の意味で用いられていると考える。船の——第一義的には、赤壁で焼けた曹操軍の船ということになる。だが、私は、曲解かもしれないが、さらに、維新後日本海上に見られるようになった汽船の勇壮な煙も念頭にあるのではないかと考える。明治初めは、まだ帆船が主流であったが、沿岸航路では汽船も普及しつつあった。作者も一度ならず見たことがあるのではないか。けふりも——「けぶり」、「けむり」の両様の発音または表記は古くからあったようだが、歌語としては、「けぶり」が用いられたであろう。大中臣能宣「田子の浦に霞の深く見ゆるかな藻塩の煙

立ちや添ふらん」。煙と霞をセットにするのは、和歌によく見られ、この歌も踏襲する。ただ、その煙は、先に引用した万葉集の「志賀の海人の・・・」のように、多くは藻塩を焼く煙で、恋の苦しさを暗示するのに対して、赤壁の戦火と関係づけるのは、特異。忍ふまで——上代は「しのふ」で、四段活用。平安時代になって、「忍ぶ」（本来は上二段活用）と混同して「しのぶ」となり、上二段にも活用。耐え忍びながら、故人や恋人を思うニュアンスとなった。ここでは四段活用で使っているが、上代語としてではないので、濁って読んだ。昔を忍んだり、恋人を忍ぶならば、いかにも和歌らしいが、霞を見て、戦火を忍ぶというような、強烈な懷古は和歌ではあまりないのではないか。そのちくはぐさを新時代の和歌として、面白いと考えたか。霞から蒸気船の煙を忍ぶという私の説でも、蒸気船の煙から霞を忍ぶならともかく、理路の流れがおかしい。新千載集「思ひ出でて忍ぶまでこそ難くとも見し人間はむ数にもらすな」。春は霞める——春と霞を連ねるのは、和歌の常套。藤原良経「久方の雲居に見えし生駒山春は霞の麓なりけり」。葉室光俊「常永久に春は霞める空なれどなほ曙に似る時はなし」。波の上かな——「波の上かな」で終わる和歌は甚だ多い。波のもつ、ゆったりとしたような、不安なようなあいまいな気分を表現したのであるうか。藤原定家「朝風に行き交ふ舟の景色まで春を浮かぶる波の上かな」。下二句、句作り自体は平凡で古句を組み合わせたに過ぎないが、霞や波の上を、赤壁で焼かれた舟に結びつけるのは、新奇にしてまた異様。

*まずは、赤壁で幾千万の船が焼かれた故事と新しい西洋からの異物（蒸気船）と万葉集の語と王朝和歌のしばしば詠む霞とを同居させようとした創意は評価すべきであろうが、それらが有機的に結合したとはいえず、ばらばらの印象しか残らない。後に近代短歌が、伝統を保ちながら、新時代に対応し、複雑な心の内面を表現するようになったのは、及ぶべくもないが、少なくともその方向の意欲は認めるべきであろう。この歌の背後にも、出雲赤壁をなんとか文学の材料にして、世に顕彰したいという、雨森精翁の慾憑が感じられる。そのために、ごっちゃ煮の批判を覚悟の上で、中国・日本、上古・王朝・古代・維新の観点を交えて、出雲赤壁を料理したのだと思う。

本稿は、

島根大学法文学部山陰研究センター―山陰研究共同プロジェクト

一九一三 近代山陰地域の文化教養環境における漢詩文の位置――若槻克堂と剪淞吟社の学際的研究

実施年度…二〇一九～二〇二一年度 代表 要木純一

及び、

科研究費 基盤研究(C)

近代山陰地域の文化教養環境における漢詩文の位置――若槻克堂と剪淞吟社の学際的研究

(研究課題／領域番号 19K00296 期間 二〇一九～二〇二一年度 研究代表者 要木純一)

による成果の一部である。